

人 麻 吕 様 城 跡

—代替墓地建設に伴う発掘調査報告書—

1999.3

高知県土佐市教育委員会

人 麻 呂 様 城 跡

代替墓地建設に伴う発掘調査報告書

1999. 3

高知県土佐市教育委員会



人麻呂様城跡と仁淀川



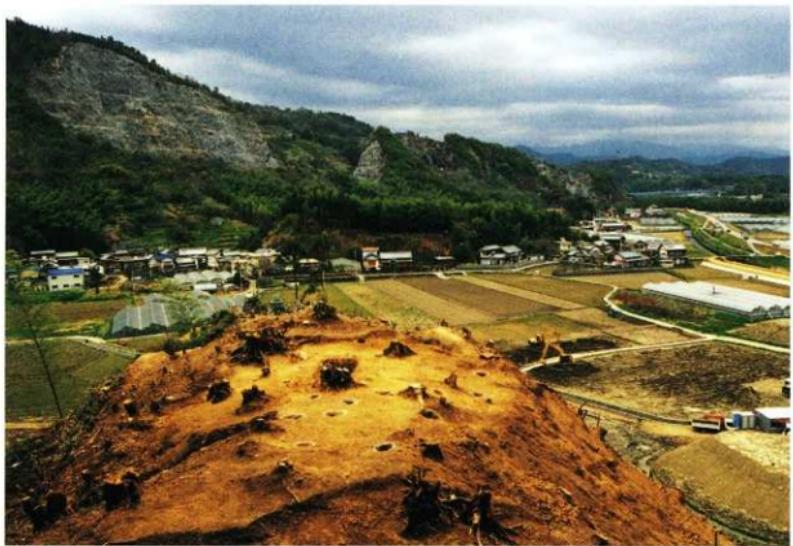
人麻呂城跡全景



堀切完堀状況（東より）



堀切バンクセクション（西より）



屋根上造構と北側平野部



復元された塹壕

序

土佐市では、平成8年度から四国横断自動車道や国道56号線土佐市バイパス建設に伴う遺跡の発掘調査が行われており、全国的に注目された居德遺跡群出土の木胎漆器や国内最古の木鉄、天崎遺跡出土の4本の中広形銅矛、光永・岡ノ下遺跡出土の湖州方鏡など多くの成果をあげています。

今回の人麻呂様城跡の調査も高速道建設に伴う代替墓地造成によるもので、(財)高知県埋蔵文化財センター主任調査員松村信博氏指導のもと、平成9年度に行われました。

本市では、初の中世城館跡の発掘となった今回の調査では、箱塙が検出されるなど、土佐市そして高知県の中世史を考える上での貴重な資料を得ることができました。また、遺跡内に戦時中築かれた塹壕の聞き取り調査では、地元の方々より数多くの貴重な証言をいただきました。

今回検出された箱塙、塹壕等の遺構は、残念ながら工事により消滅することになりましたが、記録保存を行い、報告書の刊行という形で公表し、後世に伝えることができました。刊行にあたり、本書が広く活用されることを祈念してやみません。

最後になりましたが、ご指導いただいた松村氏をはじめ(財)高知県埋蔵文化財センターの皆様、塹壕の聞き取り調査にご協力いただいた地元関係者の皆様、発掘調査にご協力いただいた国沢工業、(株)アイシー、須崎森林組合の皆様、寒風吹きすさぶ中、作業に従事していただいた発掘作業員の皆様、整理作業に従事していただいた皆様、そして、埋蔵文化財行政に深いご理解とご支援をいただいた日本道路公団高知工事事務所の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成11年3月

土佐市教育委員会

教育長 阿部 光二

例　　言

- 1 本書は土佐市教育委員会が平成9年度に実施した墓地の移転、造成に伴う人麻呂様城跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 人麻呂様城跡は、高知県土佐市高岡町字冠ケ内2881番地1地先他に所在する。
- 3 発掘調査は平成10年1月9日から3月19日まで実施した。
- 4 調査面積はI区(144m²)、II区(512m²)であり、総調査面積は656m²である。
- 5 調査体制
 - (1) 調査員　岡本　裕介(土佐市教育委員会生涯学習課　主事)
 - (2) 総務担当　坂本　清幸(　　　　　　〃　　　　　係長)

なお、調査にあたっては、(財)高知県埋蔵文化財センター主任調査員松村信博氏のご指導を受けた。
- 6 本書の編集は岡本が行い、執筆は第V章を松村・岡本が、それ以外を岡本が分担した。
- 7 本報告書を作成するにあたっては、松村氏の他、五輪については岡本桂典氏(高知県立歴史民俗資料館主任学芸員)のご教示を頂いた。
- 8 遺物整理・図面作成等の作業においては、入野三千子・川久保香・山口知子氏の協力を得た。
- 9 発掘現場作業員は下記の方々である。寒さの中、作業に従事された皆様に対して、記して敬意を表したい(敬称略)。
- 布村　利恵、岡本　弘美、安岡　縁、山中　益代、山本　千恵、前川　喜美子、産田　康子、光内　幸
- 10 重機による表土剥ぎ、排土運搬は国沢工業の国沢清二、国沢智、藤原利行氏の便宜、助力を得た。
- 11 出土遺物は、「97-23HC」と注記し、土佐市教育委員会において保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過.....	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的歴史的環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 調査の経過及び方法.....	7
第1節 調査の経過.....	7
第2節 調査日誌抄.....	7
第Ⅳ章 調査の成果.....	9
第1節 I区.....	9
(1) 層序.....	10
(2) 遺構.....	11
(3) 遺物.....	12
第2節 II区.....	13
1. 堀切.....	15
(1) 層序.....	15
(2) 遺物.....	16
2. 尾根上遺構.....	16
3. 断壁.....	18
第Ⅴ章 まとめ人麻呂様城跡・中世城郭と四国防衛軍.....	19
1. はじめに.....	19
2. 中世城郭としての人麻呂様城跡.....	20
(1) 地形と立地.....	20
(2) 地籍図及び長宗我部地検帳による周辺景観の復元.....	20
(3) 遺構（箱堀状の堀切）縄張図から見た人麻呂様城跡.....	22
(4) まとめ.....	24
3. 四国防衛軍関連遺構.....	25
(1) 高知平野における第55軍（四国防衛軍）と土佐市周辺の状況.....	25
(2) 城跡周辺の遺構の現況と構築時の塹壕の姿.....	25
(3) 第2次世界大戦の記憶を記録する。地元土佐市の記録.....	26
(4) 戦争遺跡に対する取り組み.....	28
4. 明日への展望.....	29

図版目次

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| Fig. 1 土佐市位置図 | Fig. 11 堀切平面図 |
| Fig. 2 人麻呂様城跡周辺の遺跡分布図 | Fig. 12 堀切セクション図（東壁） |
| Fig. 3 調査区全体図 | Fig. 13 掘切出土遺物実測図 |
| Fig. 4 I 区全体図 | Fig. 14 II 区遺構平面図（ピット） |
| Fig. 5 TR-1東壁セクション図 | Fig. 15 II 区遺構平面図（塹壕） |
| Fig. 6 TR-5北壁セクション図 | Fig. 16 土佐市域の城館跡 |
| Fig. 7 I 区遺構平面図 | Fig. 17 人麻呂様城跡周辺の小字図 |
| Fig. 8 I 区出土遺物実測図（擂鉢） | Fig. 18 人麻呂様城跡縄張図 |
| Fig. 9 I 区出土遺物実測図（五輪） | Fig. 19 人麻呂様城跡周辺の塹壕 |
| Fig. 10 II 区全体図 | Fig. 20 人麻呂様城跡周辺の輜重兵第11連隊展開図 |

表 目 次

Tab. 1 I 区ピット計測表

Tab. 2 II 区ピット計測表

写真図版

- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 卷頭図版 1 | PL. 8 堀切調査風景、叩石出土状況 |
| 卷頭図版 2 | PL. 9 堀切バンクセクション（東側より） |
| 卷頭図版 3 | PL. 10 堀切バンク（東側より）、完掘状況（西側より） |
| PL. 1 人麻呂様城跡全景（上空より） | PL. 11 尾根上遺構（南側より） |
| PL. 2 人麻呂様城跡全景（上空より） | PL. 12 現在も残る塹壕 |
| PL. 3 人麻呂様城跡遠景（北側より） | PL. 13 塹壕調査風景、復元された塹壕 |
| PL. 4 I 区調査風景・遺構完掘状況 | PL. 14 発掘調査風景 |
| PL. 5 I 区（TR-1セクション、集石） | PL. 15 調査区出土遺物 |
| PL. 6 堀切調査前風景（南側上方、西側より） | PL. 16 記者発表風景、作業員集合写真 |
| PL. 7 急斜面での調査、堀切調査風景 | PL. 17 南側斜面地下壕入口、人麻呂様城跡現状 |

第Ⅰ章 調査に至る経過

今回の人麻呂様城跡の発掘調査は、高速道建設に伴う墓地の移転に伴うもので、土佐市内では初の城館跡の発掘調査であった。

人麻呂様城跡は仁淀川右岸の土佐市高岡町八幡の丘陵上に位置している。遺跡の範囲内には山城の防衛施設である堀切の跡と思われる陥没などがみられたが、当城跡について記した文献が見つかっておらず、多くの不明点を残している城跡であるといえる。また、城館に関する造構の他に、旧日本軍によって築かれた斬壕跡も確認されている。

近年まで城跡一帯は、特に大きな変化もなく推移してきたが、当城跡の立地する丘陵上において四国横断道の建設工事が行われることとなった。高速道の工事そのものは、城跡の範囲から外れていたものの、ルート上にあった墓地が移転することとなり、その一部が当城跡の範囲内にあたることから、関係各機関で協議を行った結果、工事により影響を受ける部分について記録保存を目的とした発掘調査を行うこととした。

調査は土佐市教育委員会が主体となり、(財)高知県埋蔵文化財センターの指導のもと、同センターより調査員の派遣を受けて行われた。

調査期間は平成10年1月9日から3月19日までの実働42日間で、調査面積は約656m²であった。

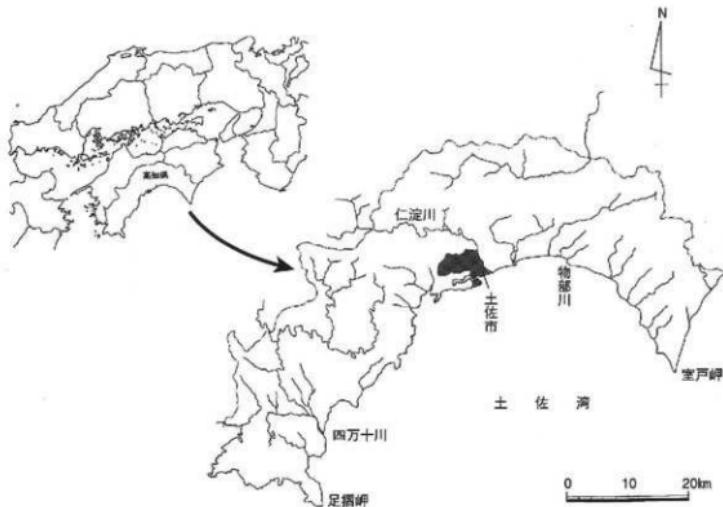


Fig. 1 土佐市位置図

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

土佐市は高知県南央部、仁淀川下流右岸に位置し、東は仁淀川を隔てて春野町と、北は虚空蔵（不入）山系を境に伊野町・日高村と、西は同じく虚空蔵山系を境に佐川町と、南は横瀬（御領寺）山系を境に須崎市と接し、一部は土佐湾に向している。古くより温暖な気候と豊富な水資源を活かした農業の他、製紙業、水産業が盛んで、土佐文旦、温州みかんなどの柑橘類、施設園芸で栽培されるキュウリ、ピーマン、テッポウユリなどの野菜・花卉類、波介川流域で栽培されるイグサ、土佐和紙、カツオの生節、ウルメイワシ、アサリ貝などが特産品となっている。

経緯度的には北緯 $33^{\circ}30'$ 、東經 $133^{\circ}26'$ に位置し、北部は虚空蔵山系、中央部から南部にかけてその支脈である横瀬山系に属する山々が連なり、市東部の高岡、用石、新居で仁淀川の浸食を受けた扇状地性低地を形成している。また、前述の両山系の間を流れる波介川流域には氾濫源性の低地が東西約4km、南北約0.7kmにわたって広がり、南部の宇佐、新居池ノ浦地区には沿岸流による平地が形成されている。横浪半島は先端部約2.5kmが土佐市域となっており、竜崎で海中に没している。

今回調査の対象となった人麻呂様城跡は虚空蔵山系より派生した丘陵上にあり、高岡町の市街地からは北へ約1.7kmの地点に位置している。丘陵は北側斜面から3本の尾根が樹状に突き出す形となっており、竹や種々の樹木よりなる雑木林に覆われている。虚空蔵山系とは北西方向でつながっており、周囲は仁淀川により形成された扇状地性低地となっている。3本の尾根の内、真ん中の尾根の中腹には半円筒形の陥没があり、第二次大戦中に築かれた整壕跡が丘陵各所にみられる。また、丘陵の南側斜面の麓には松尾八幡宮があり、同社に奉納されている絵馬のうち、絵師久保南窓が揮毫した明治初期の小学校の授業風景を描いたものと、幕末から明治にかけて活躍した絵師河田小龍が静御前の舞姿を描いたものが市の有形文化財に指定されている。

周辺の遺跡としては、4本の銅矛が出土し、注目を浴びた天崎遺跡をはじめ、八幡遺跡、御太子宮遺跡、八幡光本遺跡、野田遺跡や全国的に注目された木胎漆器や国内最古の木鍼など縄文から中世に至る多くの遺物・遺構が出土した居館遺跡群がある。また、周辺の城跡としては、当城跡から南東へ約1.7kmの所に林口城跡があり、土佐戦国七雄の一角として活躍した大平氏の居城として知られる蓮池城は南東へ約2.3kmの地点にあり、対岸の仁淀川左岸には、八田城跡（伊野町）、八幡西ノ城跡（春野町）がある。

第2節 歴史的環境

土佐市では、これまでに行われた遺跡分布調査等により、縄文時代以降の遺跡の存在が確認されており、近年の公共工事に伴う発掘調査の成果は、これらの遺跡の様相を徐々に明らかにするものである。

前述したように土佐市における最古の遺跡は、縄文時代に属するもので、徳安遺跡において縄文草創期に属するサヌカイト製の尖頭器が発見されたのをはじめ、数遺跡から縄文時代の遺物が表記されている。近年の発掘調査では、居德遺跡群から縄文時代を考える上で非常に重要な遺物が発見されている。平成9年度の調査では、大洞式土器が出土し、10年度の調査では、木胎漆器と木鍬が出土している。前者に施された花弁を単位文とした繊細で複雑な文様は、他に類例を見ないものであり、後者は現時点で国内最古の木鍬であり、縄文時代の農耕を考える上で貴重な資料である。同遺跡群は、縄文から中世に至る複合遺跡であり、前述の遺物の他に県下最大級の祭祀跡（古墳時代）なども確認されており、土佐市の歴史を考える上で重要な位置を占める遺跡の一つである。

弥生時代に関しては、古くは明治期に波介万法寺（現波介万法寺遺跡）より銅矛2本が出土したとの記録があり、戦後には南岐山遺跡から住居跡の他、石斧、石鎌などの石器類が発見されている。また、波介地区からは他に、具体的な出土地点や年月日については不明であるが、銅劍型磨製石劍も出土している。これら從前からの成果に加え、四国横断自動車道や土佐市バイパス建設に伴う発掘調査では、注目すべき成果が相次いで発表されている。平成9年度の天崎遺跡の調査では、中世の水路跡の埋土を掘り込んで作られた土坑の中から4本の銅矛が出土した。これらの銅矛は、弥生時代中期から後期にかけて北部九州で生産された中広形銅矛b類と呼ばれるものである。また、居德遺跡群からは、土器をはじめ石鎌、石斧、石包丁、石錐、石棒、剝片、叩石、凹石などの石器類や鍬などの木製品が大量に出土した他、柱穴や土坑などの遺構が確認されており、天神遺跡の調査では、堅穴住居跡が確認されている。

古墳時代では、大規模な祭祀跡の発見が特筆すべき事柄としてあげられる。居德遺跡群から県下最大級の祭祀跡が確認されたことは、前述したが、これまでの調査により、当時の河川とみられる谷に沿って營まれた祭祀空間は約2万m²にもおよぶと考えられている。出土遺物も壺、高壙などの土師器をはじめ硬玉製の勾玉、碧玉製の管玉、手捏ね土器や壺、壙等の県内最古の部類に入る須恵器など質量とも豊富で、その総数は、平成10年10月時点でおよそ5万点を超えており、他にも平成8年度の光永・岡ノ下遺跡の調査でも、土師器の壺、壺、高壙などが一括して出土した箇所がみられ、同9年度の天崎遺跡の2次調査では、小河川沿いの粘土層から高壙やミニチュア土器が集中して出土した箇所がみられた他、臼、板、杭などの木製品が出土し、近くでは堅穴住居跡が確認されている。古墳時代は弥生時代などと比べて資料が少なかった時代であつただけに、これらの祭祀跡と出土遺物は、祭祀のみならず土佐市の古墳時代を考える上で重要である。なお、土佐市内においては、古墳は消滅墳1基を含む4基が確認されている。

古代の土佐市については、文献資料が少なく、高岡郡下では数少ない須恵器の窯跡である火ノ場窯跡以外に目立った遺跡、遺物もみられず、不明瞭な点を多く残していた。しかし、近年の発掘調査により、古代の土佐市を考える上での手がかりが集まりつつある。土佐市バイパス建設に伴う光

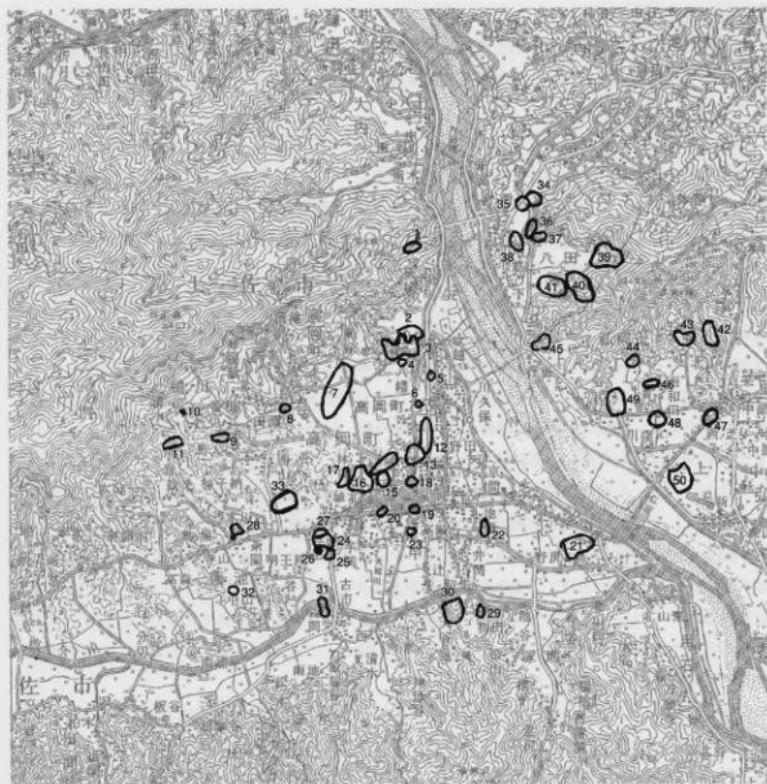


Fig. 2 人麻呂様城跡周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	清滝愛宕山道跡	11	鳴川遺跡	21	中島遺跡	31	森岡遺跡	41	八田神母谷遺跡
2	天崎道跡	12	野田遺跡	22	地頭名遺跡	32	寺山遺跡	42	吉良城跡
3	人麻呂様城跡	13	光水・岡ノ下遺跡	23	明官寺大古墳跡	33	北高田遺跡	43	吉良邸敷跡
4	八幡道跡	14	天神遺跡	24	葦池城跡	34	岩瀬ノ鼻遺跡A	44	奥谷遺跡
5	御太子宮遺跡	15	天神三鳥遺跡	25	勝賀野次郎兵衛城跡	35	岩瀬ノ鼻遺跡B	45	八田城跡
6	八幡光木道跡	16	高岡林口遺跡	26	蓮池城跡西面垣登跡	36	鍵音ノ鼻道跡	46	八幡宮西ノ城跡
7	居籠道跡群	17	林口城跡	27	蓮池城跡北面遺跡	37	鍵音ノ平道跡	47	西ノ芝遺跡
8	東誰沖屋敷遺跡	18	大ノ場窯跡	28	城ヶ森城跡	38	新田遺跡	48	古市遺跡
9	鳴川深見遺跡	19	明官寺遺跡	29	初田遺跡	39	八田奈路遺跡	49	蔽島遺跡
10	宮ノ谷古墳	20	高岡木町遺跡	30	三宝山城跡	40	八田御谷遺跡	50	天皇遺跡

永・岡ノ下遺跡の調査では、縁釉陶器とともに古代末から中世にかけてのものと思われる湖州方鏡が出土しており、鏡背には「湖州真石家念二叔青銅照子」と鋳出されている。なお、湖州鏡は県内に数点の出土例があるが、方鏡としては県内で初めての出土である。土佐市バイパス関連の調査では、他に林口遺跡からも縁釉陶器が出土している。また、市西部の西鴨地遺跡からは縁釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、製塩土器、当時の役人が身に付けていたと考えられる帯金具や祭祀で使用された畜市や人形等の木製品が出土している。明確な建物跡こそ発見されていないものの、これらの遺跡から出土した遺物は、官衙の存在を印象づけるものである。

中世に入ると、考古学的には遺跡数が増加し、発掘調査においても光永・岡ノ下、天神、林口の各遺跡から屋敷の一部とみられる遺構が発見されるなど、少しずつ当時の状況が明らかになりつつある。文献上でも、源平争乱期の寛永元年（1182）、蓮池城主の蓮池家綱が播磨の住人畠田俊遠と共に当時介良庄に流されていた源希義を討ち、その後、追捕使伊豆右衛尉有綱や香美郡夜須庄莊官夜須行宗によって討たれたとの記録が『吾妻鏡』や『南海通記』の中にみられ、南北朝期の暦応2年（1340）には、戸波の名主・莊官らが南朝方として戦ったことが『佐伯文書』に記述されている。なお、鎌倉期については、史料を欠き、よく分かっていないのが現状である。また、今回調査の対象となった人麻呂様城跡を含め、土佐市内では、24の城館跡が確認されており、土佐戦国七雄の一大平氏の居城である蓮池城は重要遺跡となっている。

その蓮池城を居城とした大平氏は、前述したように土佐戦国七雄の一員として高岡郡東部で勢力をふるい、全盛期には、高岡郡下の越知、日下、浦ノ内や吾川郡の芳原、土佐郡の鷹部にまでその勢力を拡大した。また、文芸の面でも秀でており、中でも歌人として活躍し、京の文化人とも交流があった大平国雄の業績は群を抜いている。

このように隆盛を誇った大平氏も、戦国の動乱の中で次第に勢力を失い、永禄9年（1566）、城主国興の時に一条氏の攻撃により居城蓮池城を追われ、戸波積善寺に逃れた。そこへ一条氏の追手が迫り、国興らは自殺に追い込まれ、約350年続いた大平氏は滅亡した。そして、蓮池城は一条氏の番城となったが、永禄12年（1569）に長宗我部氏が奪取し、長宗我部元親の弟吉親貞が城主となった。翌永禄13年（元龜元年1570）には、戸波城（伊乃保岐城）も攻め落とし一条氏を西方に追いやり、元親の従弟親武が城主に任せられた。

こうして現在の上佐市域は長宗我部氏の勢力圏となつたが、その長宗我部氏も慶長5年（1600）の関が原の戦いで西軍に付いたことにより領国を失い、代わって遠江掛川より山内氏が入国し、近世を迎えることとなる。

〈参考文献〉

『土佐市史』1978年 土佐市

『高知県遺跡地図』1998年 高知県教育委員会

『高知県中世城館跡分布調査報告書』1984年 高知県教育委員会

廣田佳久・小野由香・岡本裕介『林口遺跡』1998年 土佐市教育委員会

『平成8年度土佐市バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 天神遺跡第I調査地区、犬ノ場遺跡』

第Ⅰ調査地区』記者発表及び現地説明会資料1996年（財）高知県埋蔵文化財センター
『平成8年度土佐市バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 犬ノ場遺跡第Ⅱ調査地区』記者発表及び現地説明会資料1997年（財）高知県埋蔵文化財センター
『平成8年度土佐市バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 林口遺跡第Ⅰ調査地区』記者発表及び現地説明会資料1997年（財）高知県埋蔵文化財センター
『平成9年度四国横断自動車道建設工事に伴う天崎遺跡埋蔵文化財発掘調査』現地説明会資料1997年（財）高知県埋蔵文化財センター
『平成9年度高知県土佐市人麻呂様城跡・天崎遺跡』記者発表資料1998年 土佐市教育委員会・（財）高知埋蔵文化財センター
『四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う土佐市西鴨地遺跡』現地説明会・記者発表資料1998年（財）高知県埋蔵文化財センター
『居徳遺跡群』平成9年度現地説明会資料1998年（財）高知県埋蔵文化財センター
『居徳遺跡群Ⅱ』平成10年度現地説明会資料1998年（財）高知県埋蔵文化財センター
『居徳遺跡群Ⅲ』鉢出土について記者発表資料1999年（財）高知県埋蔵文化財センター
※犬ノ場遺跡は名称を変更して現在、光永・岡ノ下遺跡となっている。



人麻呂様城跡遠景（北側より）

第Ⅲ章 調査の経過及び方法

第1節 調査の経過

平成9年12月に調査区域の樹木の伐採を須崎森林組合に依頼して行い、発掘調査は平成10年1月9日から開始した。便宜上、丘陵麓の谷間の調査区をI区、丘陵上の調査区をII区とし、まずI区の調査を行い、その後、II区の調査を行うこととした。

I区の調査は、まず調査区表面を覆っている枯れ草等を人力にて除去した後、トレンチによって包含層を確認しながら進めることにした。調査区の切株の除去、トレンチ及び調査区の遺物包含層の上面までは重機にて掘削し、包含層の掘り下げ、遺構、遺物の検出は人力にて行った。

II区の調査は、1月22日より開始し、調査区及び丘陵斜面に堆積した枯れ草、枯れ枝の除去を行った。除去作業終了後、II区の掘削土を丘陵下に排出するためのシーチャーを丘陵斜面に設置した。掘削は土層確認のためのトレンチを設定した後、陥没部とその周辺を地山層まで掘削することとし、中央部の幅約1mを断面図作成のためのバンクとして残した。また、壇場跡については、堆積していた腐食土を人力にて除去した。なお、II区の掘削作業は、遺構の性格や立地等の条件により全て人力にて行った。

測量は、(財)高知県埋蔵文化財センターが大崎遺跡発掘のために設置した3級基準点を利用して任意に設定した基準点を基に行った。また、3月15日には、ラジコンヘリを使った航空測量を測量会社に委託して行った。なお、平面図及び断面図は20分の1を基本に適宜任意の縮尺を用いた。

3月16日より補足の測量、シーチャーの撤去、現場事務所、作業用具の撤収を順次行い、3月19日をもって全ての作業を終了した。

第2節 調査日誌抄

1998年1月9日～3月19日

- 1.9 発掘調査初日。I区の表面を覆っていた枯れ草等の除去を行う。その後、TR-1とTR-2の設定を行った。
- 1.12 I区の表土、竹の切株の剥ぎ取りとTR-1、TR-2の掘削を重機と人力により行う。
- 1.13 TR-3、TR-4を設定し、人力にて掘削を行った。
- 1.14 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.16 TR-3、TR-4の掘削を行う。
- 1.19～1.20 I区の遺構検出とTR-1東壁セクションの実測を行う。
- 1.21 TR-1東壁セクションとI区の遺構検出状況の写真撮影を行った後、TR-5の掘削を重機及び人力にて行った。
- 1.22 I区遺構調査とTR-5の掘削を行い、掘削終了後、完掘状況の写真撮影を行う。その後、I区平面実測とII区堀切部清掃を行う。
- 1.23 雨天のため現場作業を中止する。
- 1.27 引き続きI区の平面実測とII区の堀切部の清掃を行う。
- 1.28 尾根上のII区と麓のI区の間の斜面の清掃を行う。

- 1.29～1.30 II区から出た排土を麓に落とすためのシーチャーの設営を行う。
- 2.2～2.19 II区の調査を行う。
- 2.20 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.23 引き続きII区の調査を行う。
- 2.24 雨天のため現場作業を中止する。
- 2.25～3.6 引き続きII区の調査を行う。
- 3.7 II区の調査と並行して縄張図作成のための測量を行う。
- 3.9 堀切バンクセクションの分層と写真撮影を行う。
- 3.10 午前中は記者発表を行い、午後は堀切部バンクセクションの実測を行った。
- 3.11 雨天のため現場作業を中止する。
- 3.12 引き続き堀切バンクセクションの実測を行い、その後、バンクの除去作業を行った。
- 3.13 ラジコンヘリを使った航空測量を行う。その後堀切の完掘状況の写真撮影を行う。
- 3.16～3.17 II区の平面実測と写真撮影を行う。
- 3.18～3.19 発掘機材の撤収を行い、調査を完了する。

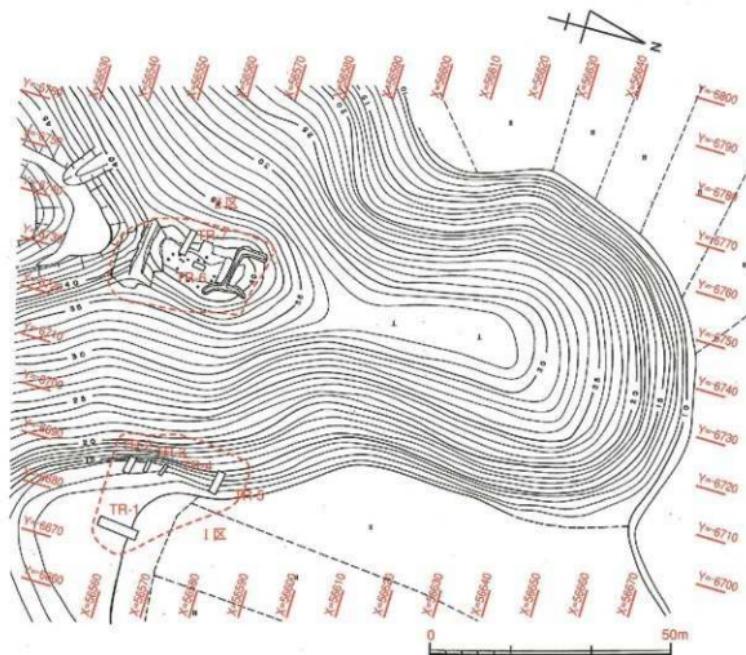


Fig. 3 調査区全体図 ($S=1/1000$)

第IV章 調査の成果

第1節 I区

I区は丘陵から突き出た二本の尾根に挟まれた平坦部にあり、調査前は竹林であった。周囲は東西南の三方を前述の丘陵と尾根に囲まれており、谷間の開口部にあたる北側では、水田と接する。平坦部には緩やかな傾斜がみられ、南から北に向かってわずかに低くなっている。また、水田との境界部では、堀状の地形がみられた。地元の人の話では、終戦直後の一時期にここで生活を営んでいた家族がいたとのことである。本調査では、この平坦部の北半分をI区として設定し、調査区内の遺構の検出及び調査区西端付近にある集石と前述した掘状地形の調査を行った。調査の結果、30基のピットが検出されたが、遺構としての性格を明らかにすることはできなかった。遺物としては、五輪、擂鉢の他に戦後当地に住んでいた人が使っていたと思われる陶器等が出土した。なお、堀状の地形についてもトレンチを設定し、調査を行う予定であったが、遺物、遺構が確認されなかつた上に湧水もひどかったので、調査を途中で打ち切った。

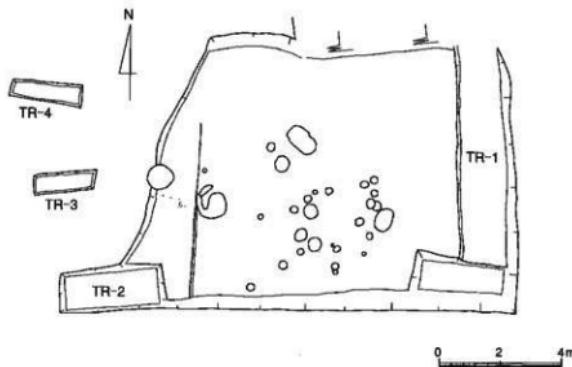


Fig. 4 I区全体図 (S=1/160)

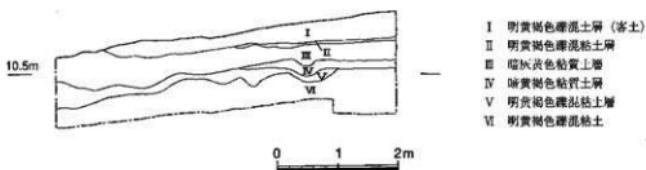


Fig. 5 TR-1 東壁セクション図 (S=1/80)

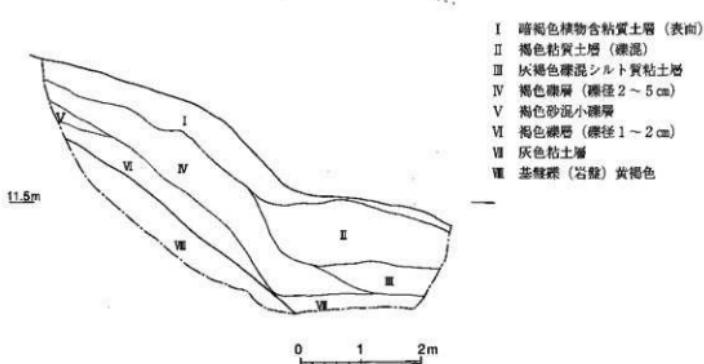


Fig. 6 TR-5 北壁セクション図 (S=1/80)

(1) 層序

調査区東端にTR-1を北西隅の斜面にTR-5を設定し、I区の基本層序の観察を行った。

TR-1はI層：明黄褐色礫混土層、II層：明黄褐色礫質粘性土層、III層：暗灰黄色土層、IV層：暗黄褐色土層、V層：黄褐色土層、VI層：明黄褐色土層となっている。I層は客土であり、造構面に該当するのはIV層である。TR-5はI層：暗褐色植物含粘質土層(表土)、II層：褐色粘質土層(礫混)、III層：灰褐色礫混シルト質粘土層、IV層：褐色礫混土層(礫径2~5cm)、V層：褐色小礫混土層、VI層：褐色礫混土層(礫径1~2cm)、VII層：灰色粘土層、VIII層：基盤礫(岩盤)黄褐色となっている。TR-5からは遺物、造構は確認されなかった。

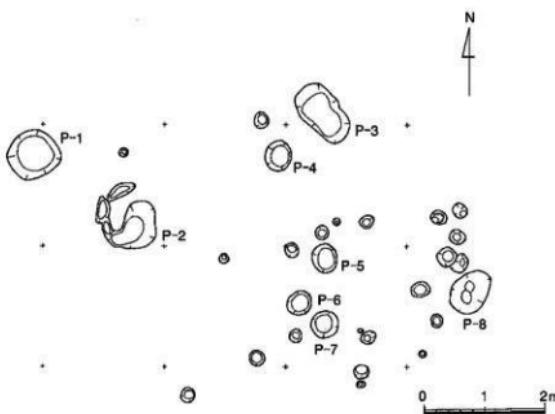


Fig. 7 I区遺構平面図 (S=1/80)

Tab. 1 I区ピット計測表

ピット (No.)	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態	ピット (No.)	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P 1	78×87	40	楕円形	P 5	47×40	17	楕円形
P 2	81×77	40	不整形	P 6	径 39	21	円形
P 3	106×62	28	楕円形	P 7	径 42	22	円形
P 4	49×43	33	楕円形	P 8	79×58	27	楕円形

(2) 遺構

I区からはピット30基が検出されているが、大きさや間隔が不規則であり、出土物跡や時期を特定することはできなかった。主なピットの径や深さはピット計測表 (Tab. 2) のとおりである。また、調査区西端付近に存在する集石二ヶ所についてもそれぞれトレンチを設定 (TR-3, TR-4) して調査を行ったが、図示できるような遺物は出土しなかった。I区からは城跡との関連を明確にできるような遺構は確認されなかった。

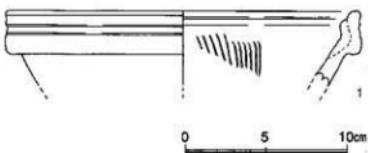


Fig. 8 I 区出土遺物実測図（擂鉢）

(3) 遺物

I 区出土遺物のうち図化し得るたものは、擂鉢と五輪の2点である。

擂鉢 (Fig. 8)

備前の擂鉢。内外面ともに赤灰色に発色する。口縁は下端が拡張し、外面に2条の凹線が施される。端部内面は沈線により凹状を呈する。内面の条線は6条1単位。近世の備前で17~18世紀の遺物である。

五輪 (Fig. 9)

調査区北側に隣接する排土置き場より表採された五輪塔の空・風輪部で高さ18.4cm、最大幅13.1cmで砂岩製である。梵字は明確に確認できないが、正面部にかすかに「キヤ・カ」の梵字が認められる。「カ」を刻す部分は面取りをしている可能性がある。墨書きは認められない。顯著にノミ跡を残しており、風化はあまり進んでいない。空・風輪部の下部は火輪に差し込むようになっている。墓塔として造塔されたものか供養塔として造立されたかは不明である。

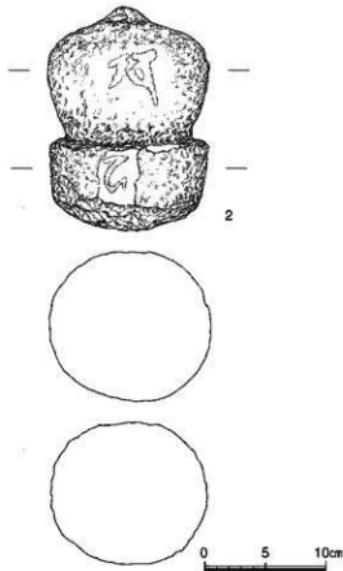


Fig. 9 I 区出土遺物実測図（五輪）

第2節 II区

II区は尾根の付け根部分に設定した調査区で、東西約16m、南北約32mを測り、調査前は雜木林であった。調査区は半円筒形の壠状地形、暫壕跡、平坦面に大別される。調査では、壠状地形や暫壕跡といった従前より知られていた遺構の確認とともに平坦面の遺構の検出に努めた。調査の結果、

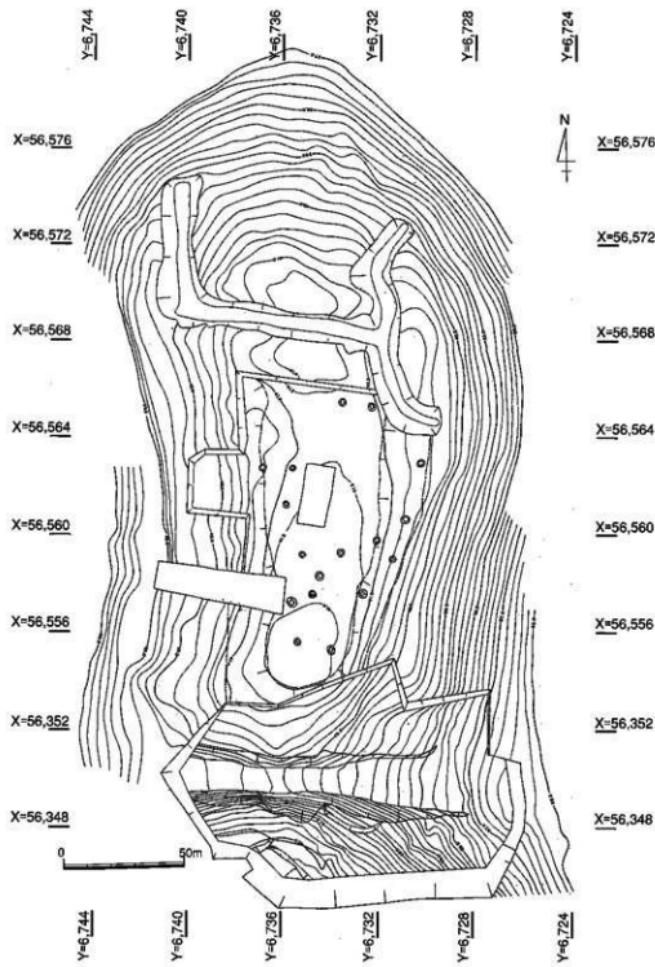


Fig. 10 II区全体図 (S=1/2000)

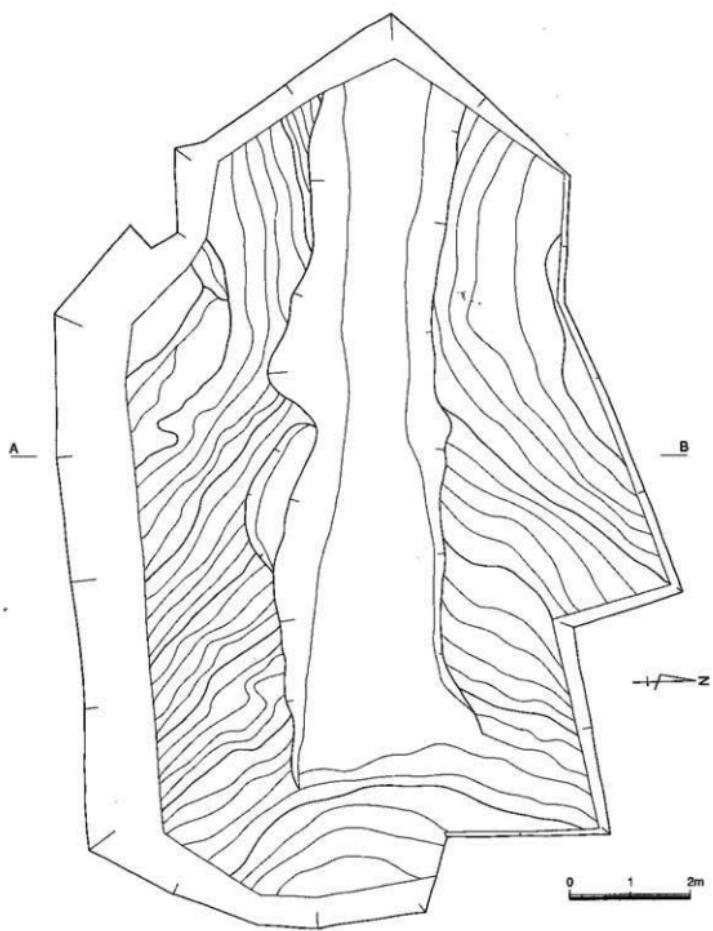


Fig. 11 堀切平面図 ($S=1/80$)

堀状地形は箱堀の跡であったことが確認され、埋土中より土器類や叩石などの遺物が出土した。また、平坦面ではピット17基を検出した。なお、転塗跡、平坦面から遺物は出土しなかった。

1. 堀切

堀切はII区の南端に位置し、南北方向にのびる尾根を分断して東西方向に形成されている。全長約12.0m、上部幅約2.2~2.9m、底面は幅約1.0~2.6mを測り、南側に約2.5m×0.7mの小段を有する。比高差は中央部北側で約1.8m、南側で約4.1mを測り、傾斜は北側は底面付近が約65°で、底面から50cm程のところまで約25°の緩斜面となり、II区の平坦面につながっている。一方、南側は約70°の急斜面で、斜面の上段はII区と同様の平坦な地形となっている。堀切底面は中央部が盛り上がりおり、両端に向かうにしたがって高さを減じている。斜面は西端に向かって傾斜がだらかになっており、特に北側においてその傾向が顕著にみられる。埋土中より土器類等の遺物が出土しているが、大半が細片で、図示できるものはほとんどなかった。

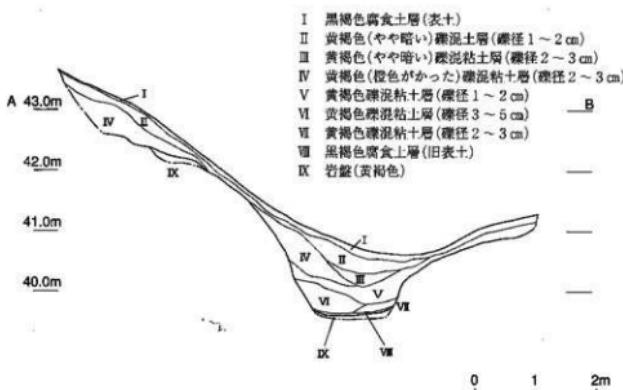


Fig. 12 堀切セクション図 (東壁) (S=1/40)

(1) 層序

堀切中央部にバンクセクションを設定し、基本層序の観察を行った。層序はI層：黒褐色腐食土層、II層：黄褐色（やや暗い）礫混土層（1~2cmの小礫を含む）、III層：黄褐色（やや暗い）礫混粘土層（1~2cmの小礫を含む）、IV層：黄褐色（橙色がかった）礫混粘土層（2~3cmの礫を含む）、V層：黄褐色礫混粘土層（1~2cmの小礫を含む）、VI層：黄褐色礫混粘土層（3~5cmの礫を含む）、VII層：黄褐色礫混粘土層（2~3cmの礫を多く含む）、VIII層：暗褐色腐食土層、IX層：岩盤（黄褐色）となっている。I層は現表土、VIII層は旧表土で、IX層が地山である。遺物はIV層から出土しているが、堀切との関連は不明である。

(2) 遺物

II区出土遺物の中で図示し得たものは、土師器坏と叩石の2点である。

土師器坏 (Fig. 13・3)

平底の土師器坏底部。磨耗が著しく、細かい調整は不明。精選された胎土で、内外面とも浅黄橙色である。詳細な時期は特定できないが、中世の資料であり、人麻呂様城が機能した時期の遺物だと考えられる。堀切からは他に、約80点ほど土師器が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

叩石 (Fig. 13・4)

表面及び両側縁に敲打痕が認められる。叩石であるが、時期の特定はできない。

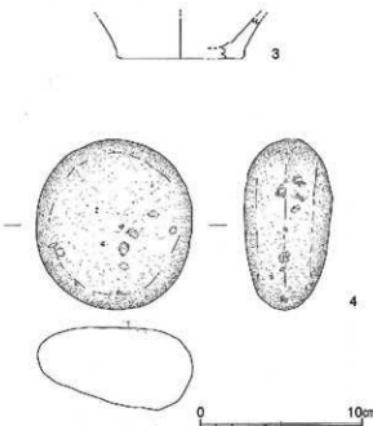


Fig. 13 堀切出土遺物実測図

2. 尾根上遺構

II区の尾根上平坦部では、ピットが17基検出されたが、I区と同様、建物跡や時期を特定するに至らず、城跡との関連も明らかにできなかった。また、出土遺物も皆無であった。なお、トレンチを二ヶ所 (TR-6、TR-7) 設定したが、遺物・遺構は確認されなかった。各ピットの径及び深さはピット計測表 (Tab. 2) のとおりである。



発掘調査風景



発掘調査風景

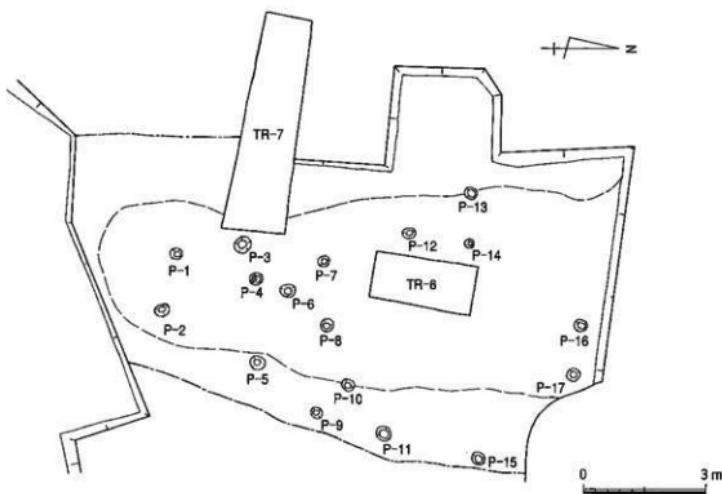


Fig. 14 II区遺構平面図（ピット）(S=1/120)

Tab. 2 II区ピット計測表

ピット (No.)	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態	ピット (No.)	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P 1	径 30	45	円形	P 10	径 31	32	円形
P 2	径 36	48	円形	P 11	径 35	48	円形
P 3	46×36	22	椭円形	P 12	31×24	42	椭円形
P 4	径 31	38	円形	P 13	径 29	58	円形
P 5	径 36	26	円形	P 14	径 24	29	円形
P 6	38×32	25	椭円形	P 15	径 32	53	円形
P 7	径 28	56	円形	P 16	径 31	106	円形
P 8	径 30	40	円形	P 17	36×30	44	円形
P 9	径 27	38	円形				

3. 訓塹

Fig. 14に示した幅約1.1~2.2m、深さ約0.7~1.8mの溝状の遺構がII区の尾根上半坦部の北端から検出されている。人麻呂様城跡一帯には、同様の遺構が數ヵ所みられ、埋没し、現状を留めていない箇所も多いが、遺構の状況は地表観察で十分把握できる。これらの訓塹は第二次大戦中に旧陸軍第55軍第11師団（錦部隊）によって築かれた訓塹である。今回の発掘調査では、当時の建設資材、工具、武器、弾薬等の遺物は出土しなかった。

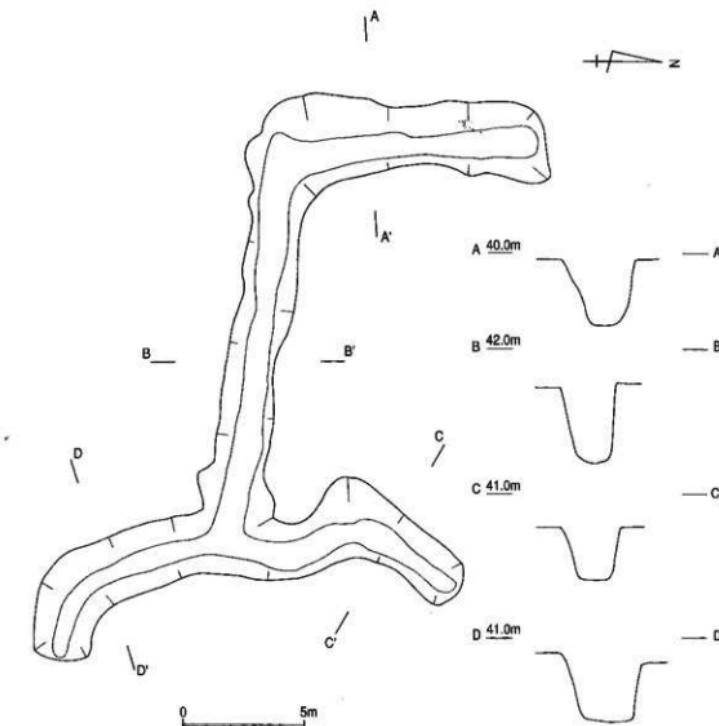


Fig. 15 II区遺構平面図（訓塹）(S=1/200)

第V章 まとめ人麻呂様城跡・中世城郭と四国防衛軍

1. はじめに

人麻呂様城跡の今回の発掘調査の成果は、城跡北限を画する堀切形状が断面逆台形の箱堀りであることを確認したこと、堀切の南側の小郭に地山岩盤堀り込みのピット状造構を検出したこと、そして、第2次世界大戦末期の塹壕が構築された時点での形態を確認できたことである。

各造構ともに、遺物の出土は僅少であり、塹壕に至っては造構が埋積する最終段階で混入したビニール片を除けば人為的な遺物は皆無であった。中世・第2次世界大戦と2度にわたる緊張状態が現出されたであろう時期にこの丘陵に何らかの軍事的な意図を持つ造構が構築された点からも、当地が要害の地であることが判る。



Fig. 16 土佐市域の城館跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	徳之森城跡	5	神明森城跡	9	蓮池城跡	13	土居山城跡	17	人麻呂様城跡
2	イシガトウ城跡	6	シロクビ城跡	10	松森城跡	14	猿本山城跡	18	天神之森城跡
3	大領寺山城跡	7	唐音山城跡	11	出間城跡	15	三宝山城跡	19	三森城跡
4	伊乃保岐城跡	8	城ヶ森城跡	12	鷹股城跡	16	林口城跡	20	新居城跡
								24	宇津賀山城跡

人麻呂様城跡についての文献資料は残されていない。しかし、遺構・遺物・縄張図・周辺中世城郭との関連などからアプローチは可能である。ここでは、中世城郭としての人麻呂様城跡の現段階で捉えることが可能な資料の中で、周辺地形・縄張図・調査で明らかになった遺構を中心に提示することによってまとめにかえたい。

一方、第2次大戦中の太平洋岸一帯の四国防衛軍の塹壕については、記録・聞き取り調査・現地踏査など様々な記録が残されている⁽¹⁾ものの、当遺跡周辺の詳細な調査・記録が行われているとは言い難い。聞き取り調査が可能な当時の記憶を残す人々も少なくなりつつある今、当時の記憶を記録に留めることが急務である。現地踏査・聞き取り調査を踏まえた上で、土佐市域、特に人麻呂様城跡一帯に限定して、第2次大戦末期に何がなされたのか、遺構の現況はどうなのか、さらにこれらの遺構を土佐市として活用していく方向まで言及できれば、と考える。

2. 中世城郭としての人麻呂様城跡

(1) 地形と立地

「人麻呂様城跡」という名称から、まず連想されることとは「柿本人麻呂」であろう。本城跡は柿本人麻呂とは直接関係なく、当城跡に歌聖である柿本人麻呂を祀る人麻呂様信仰に関連した地名だといわれている⁽²⁾。現在では、丘陵上に3箇所の祠が祀られており、地元の信仰の対象となっているが人麻呂様信仰自体は残っていない。Fig.17のように調査地点の現小字名は、「冠ヶ内」(カンムリガウチ)というが、冠ヶ内の中で谷に挟まれた水田部分には「柿の木田」という地名(小字)が残っている。

丘陵の南斜面には松尾八幡宮がある。社伝によれば、平安後期の創建が伝えられる⁽³⁾。正確な創建時期の特定はできないが、少なくとも、人麻呂様城跡が中世城郭として機能していた時に松尾八幡宮は現在地に占地していたと考えられる。

城跡は標高60m前後のピークを持つ丘陵上とその斜面一帯に占地する。丘陵は四国37番札所清瀧寺のある標高368mの清瀧山の山塊(西隣は標高467mの石土ノ森)から派生し、仁淀川の直前で平野に没入する。南面に広がる平野には水田が広がり、高岡町の町並み、蓮池城跡を望むことができ、丘陵の西南には縄文時代から古墳時代にかけて注目すべき成果を上げた居徳遺跡がある。北面する小谷は谷底小低地を形成、銅矛の再埋納(中世)が確認された天崎遺跡が丘陵に接して所在する。

(2) 地籍図及び長宗我部地検帳による周辺景観の復元

人麻呂様城跡自体は、16世紀末の長宗我部氏による検地の段階では既に城郭としての機能を失い、その役割を終えている。人麻呂様城跡の縄張り内で地検帳に残された地名は「カキノ木タ(柿ノ木田)」「カムリガ内(冠ヶ内)」などが認められるが、古城などがあったと想定できる記載は全く認められない。検地は城跡の占地する丘陵上では実施されておらず、周辺の水田及び集落に限定されている。城の機能した時期は検地の時期よりも古いと思われるが、周辺景観に大きな変化はないと思定した上で、地籍図・地検帳⁽⁴⁾から歴史的景観の概観をしてみたい。(以下、地名はFig.17参照)

丘陵の北側谷には梅ヶ崎・石畠に上田・中田などの水田が集まっている。定沢と記されるアマサ

キノ池など、湿地の記載も認められるが、城跡に接する「カムリカ内」や「カキノ木タ」も上田・中田であり、城跡北側の谷は比較的生産力の高い水田地帯であったことが分かる。これに対して、南側の馬場ソヘ・ツチタにかけては中田から下出へと南に向かうに連れて水田の質が低下、さらに南のハリキ（針木）で一旦上田になるものの、セトロ・島田以南は生産力の低い下田が広がる水田地帯となる。これらの水田地帯に屋敷地は認められない。野田から人麻呂様城跡東麓にかけての微高地には集落が展開している。城跡東南麓から野田の範囲に65軒の屋敷が記録されており、その大半が中屋敷となっている。上屋敷は光本屋敷に2軒、シンヤウ（地点不明）に1軒認められるのみであり、下屋敷は16軒、下々屋敷は城南麓に2軒である。

この微高地上の集落の北側には、丘陵北側の谷底低地を形成する加茂川が流れている。地籍図からは、加茂川の河口が予想され（小字「加茂川」「西加茂川」「北加茂川」）、城跡北東端が仁淀川につながる水路であった可能性を示している。当城跡は、この水路に面しており物資運搬の適地に位置した城だといえる。また、城跡東端からは仁淀川河口付近の下流域から伊野町まで見渡すことができる。仁淀川の水運の要衝に立地した城である。河川・水路に接するという天も点も、人麻呂様

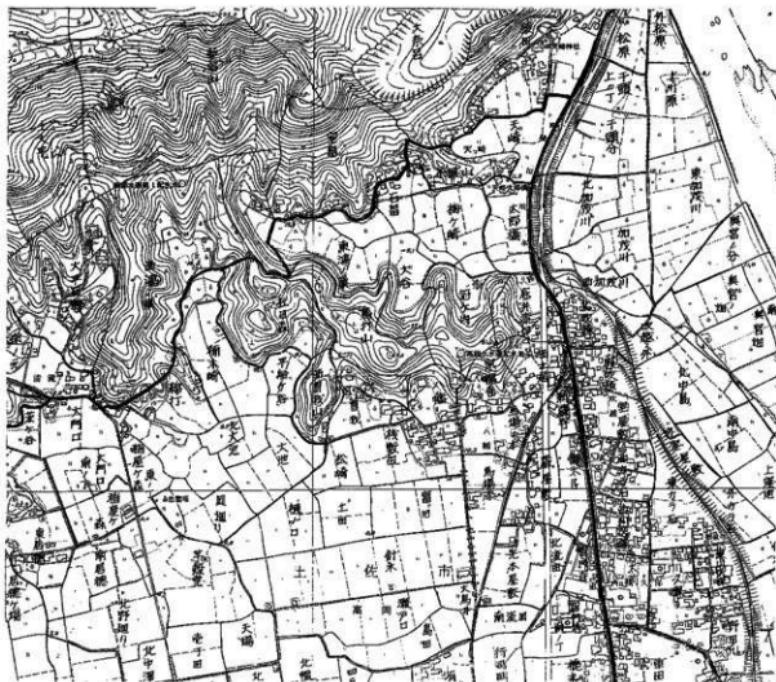


Fig. 17 人麻呂様城跡周辺の小字図 (S=1/10,000)

印…松ノ木田

城跡を考える上で重要な要素である。

(3) 遺構（箱堀状の堀切）、縄張図から見た人麻呂様城跡

高知県の遺跡地図^[5]あるいは中世城郭分布図^[6]には、当城跡は東側の2郭が人麻呂様城跡、西側の1郭が曾我山城跡として報告されている。しかし直線距離で100m程離れているとはいって、この2地点の中世城郭の残存遺構からみれば、一つの尾根上に占地する一連の遺構群と捉えることが可能であり、むしろ占地の在り方から分離することはできない。時期差がある2城であることが証明されるなど分離する明確な理由が示されない限り、1城跡として理解する方が妥当である。従って、本報告では、人麻呂様城跡と曾我山城跡の2城跡であるとして報告されている2地点の縄張りを1城跡の縄張りとして扱い、発掘調査を実施した人麻呂様城跡の呼称で記述を進めることとする。

人麻呂様城跡は、東西約300m、南北約140mの範囲の丘陵に広がっている。縄張図(Fig.18)に即して具体的に城跡の遺構を確認していく。

丘陵上のピークをなす郭は3ヶ所が確認されており、それぞれが丁度100mずつ離れた地点に占地している。西から東へ、1郭・2郭・3郭とする。1郭は最も広く、長軸46m(東西方向)、短軸28m(南北方向)、1,000m²近い面積を有する。標高は65m前後である。郭の中央に80cmほどの段差があり、南東側が高くなっている。城跡の西端に位置する1郭が人麻呂様城跡の中心となる郭(主郭)だと考えられる。

1郭の周囲には、幅5～8m(1-A郭・1-B郭)の腰曲輪が巡らされ、1-A郭の西側は墓地により改変を受けているものの堀切の痕跡(堀切1)が確認できる。1郭の東側は堀切2が、東西の南斜面には、堅堀(T-1・T-2)が配される。この2つの堅堀を結ぶラインには幅2～3mの腰郭状の平坦部(1-C)が巡らされているが、西側の3分の2には第2次大戦中の塹壕(交通壕)が構築されており、城構築時の姿からは大きく改変されている。1郭と2郭は3段の連続する小郭とそれに続く幅3mほどの尾根道で結ばれている。

城跡の中央に位置する2郭は南北13m、東西12mほどの梢円形を呈する郭である。標高は51m前後で、面積は150m²足らずと推定される。3方の尾根は全て堀切によって分断されている。西側は幅5mの堀切3、北側は今回発掘調査が行われた堀切4、東側には堀切5・6・7の3条の堀切が尾根道上に連続して設けられる。2郭の北には幅9mほどの小郭2-Aがあり、西側にT-3～T-6の4条の堅堀が放射状に配されている。堀切4の北側の平坦部(2-B郭)からは岩盤を掘り込んだピットが検出されている。2-Bの北端は第2次大戦中の塹壕が構築され、今回の調査の対象となつた。

2郭と3郭を結ぶ尾根道の中間に土佐市水道局の水道タンク(A)が建設されている。昭和30年代のことであり、施設周辺の旧地形の記録は残っていない。

東端に位置する3郭は東北方向から西南方向に延びる郭で、長軸約28m、短軸約13m、300m²ほどの面積を持つ。標高は61m前後である。3郭からは仁淀川を見渡すことができる。航行する川舟の状況をいち早くキャッチできる立地条件の郭である。3郭の西側の尾根は南北の堅堀(T-7・T-8)へと続く堀切8によって分断され、T-7に並んで東側に1条(T-9)、南東端の小郭(3-C)

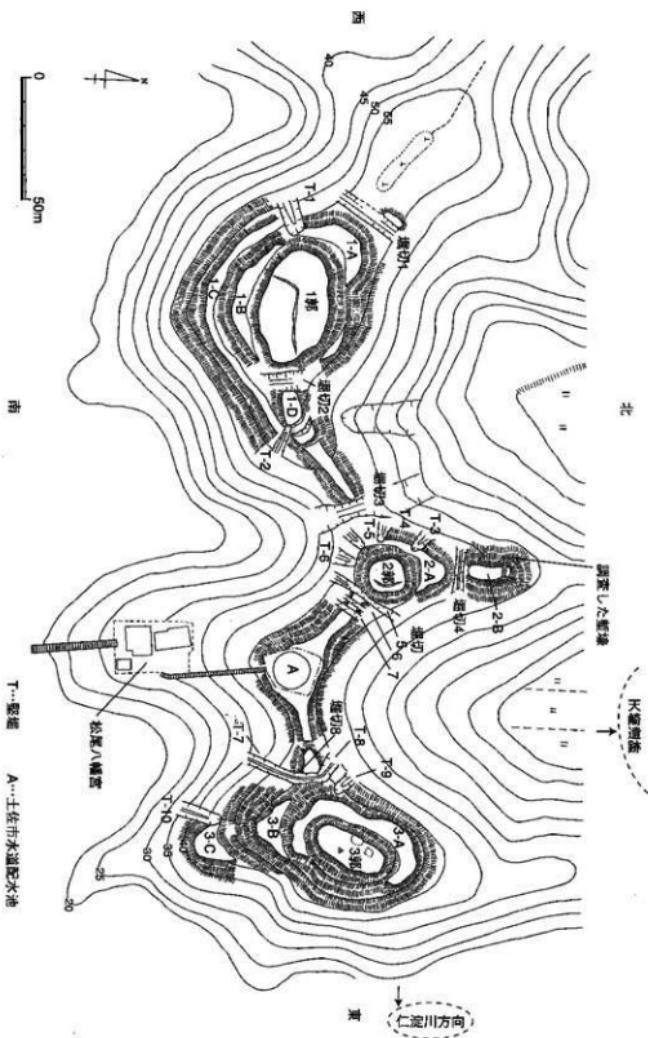


Fig. 18 人麻呂様城跡縄張図 (S=1/2,000)

の西側にも1条（1-10）の堅堀が設置されている。3郭の南・西・北側には幅4～8mの堅郭3-A郭が、さらに南側下段に3-B郭、そして8mほどの比高差を持って南側に3-C郭が配されている。3郭周辺は人麻呂様城跡の中でも最も第2次世界大戦関連の遺構が集中している地点である。3郭には2箇所の陥没が認められる。地下壕が形成されていた地点で、南東側斜面には、地下壕へ続いたであろう通路の開口部が確認できる。また3-B郭全域から3郭南東側の急斜面一帯には、交通壕とみられる堅壕が縦横無尽に張り巡らされている。この交通壕は3郭の北側3-Aへと続き、3-A郭北端でも堅壕を確認することができる。

以上遺構に即して詳述した。人麻呂様城跡の特徴として、①堅堀を多用し放射状に配した堅堀を持つ点、②連続する堀切により尾根上を分断する点、③西側の尾根道により北部山塊へのルートを確保している点、④遺跡周辺の中心河川である仁淀川に面している点があげられる。

また、調査された堀切形状は、底面に平坦面を有する「箱堀」であり、断面V字型の「薬研堀」とは異なる形状を示す。もっとも、同一城跡で両形態の堀切が存在する例も多く、堀切形状のみで城跡が分類されるものではない。県内では薬山村姫野々城跡等に箱堀の形態をもつ堀切が確認されている。堀切形態も土佐の山城構築の類型化の1指標となり得る可能性を示している。姫野々城跡もそうだが、堅堀の多用など高岡郡下あるいは仁淀川水系周辺の中世城郭に一定の共通項が認められるようである。

（4）まとめ

中世城郭としての人麻呂様城跡は、文献資料にその実態が記載されていない中世城郭である。

文献が存在しない城跡を位置付けるまでの基礎資料として、①発掘した遺構の形状（堀切4が箱堀であること・堀切の外側の2-B郭にピットが形成されていること）、②城跡全体の縄張図、③長宗我部地検帳の段階での城跡の存否及び周辺景観の3点を提示した。当城跡は高岡郷内に位置することと、人麻呂様城跡の名称が伝承されていることから、蓮池城を居城とし、文芸面での評価の高い大平氏と関係の深い城跡である可能性は高い。大平氏との関連から15世紀後半から16世紀前半に盛期を迎える城だと考えられるものの、出土遺物僅少で断定できる資料はない。

周辺城郭との関連、国人層の動向など検討すべき課題は多い。今回は遺構・縄張図を示すことができたに過ぎないが、提示した遺構・縄張・立地の諸特徴から、今後人麻呂様城跡の位置付けがなされることを期待したい。

3. 四国防衛軍関連遺構

(1) 高知平野における第55軍（四国防衛軍）と土佐市周辺の状況

第2次世界大戦末期、高知平野周辺には第55軍(四国防衛軍)が組織され、平野部一帯に展開していた。終戦直前の昭和20年7月の段階で、九州南端から樺太・千島列島に至るまで、本土決戦を想定した師団が太平洋岸を中心配備される。特に関東から九州に至る太平洋岸において重点的に力が結集された。その中で、四国太平洋岸守備部隊として組織されたのは、第55軍である。第11師団(錦兵团)、155師団(護土兵团)、205師団(安芸兵团)、344師団(剣山兵团)などから構成される第55軍は、香美郡土佐山田町新改を本部に四国太平洋岸一帯に展開した。総勢12万余り、そのうち約6万人が高知平野に集結する。土佐市一帯に展開していたのは、第11師団(錦兵团)である。

(2) 城跡周辺の遺構の現況と構築時の塹壕の姿

中世の城郭の項で触れたとおりだが、1～7の7ヶ所に第2次大戦時の塹壕が構築されている。今回の調査で構築時の姿を確認できたのは1の塹壕である。完掘した遺構は地山岩盤掘り込みで、深さは最深部で1.8m幅1.1～1.5m、調査前には礫や腐食土で30～50cmの深さまで埋まっていた。

本報告書中で写真で復元した姿を示したように、当時は上面を草や枯木で覆い、上空から発見されない工夫がなされていた。交通壕として造られた塹壕であり、平均的な体格の当時の兵士がゆっくり立って通ることのできる深さとなっている。

5・6にも移動を目的とする交通壕が現存している。溝状の遺構が等高線に沿って構築されている。

地点によっては埋まってしまい、ごくわずか観察できるだけの地点もある。また、7には横穴が現存している箇所がみられる。

最も塹壕の集中するのは、地点2～4である。丘陵の南斜面の塹壕は網の目のように延び、迷路のようである。交通壕は急傾斜の斜面下から城跡の東端の郭へと至る。郭の形成される山腹には杭が穿たれ、地下壕が構築されていた。山頂平坦部には2ヶ所の陥没地点が確認される。

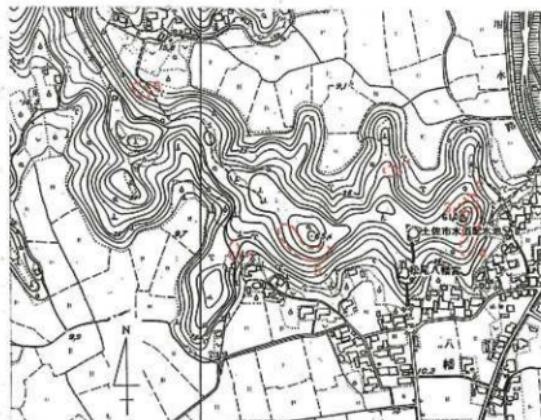


Fig. 19 人麻呂様城跡周辺の塹壕 (S=1/7,000)

(3) 第2次世界大戦の記憶を記録する。地元土佐市の記録

今回の聞き取り調査では、人麻呂様城跡に塹壕が築かれた当時の状況について貴重な証言を得ることができた。

まず、人麻呂様城跡を含む高岡町北部の丘陵地帯に展開した部隊については、津野（当時篠原姓）長幸さんよりご教示を頂いた。輜重兵第11連隊で小隊長を務められた同氏によると、八田（現伊野町）に本部があった同連隊第1大隊のうち、一個中隊が仁淀川右岸の高岡に配備され、高岡第一小学校に中隊本部を置いていたとのことである。中隊は四個小隊からなり、武内小隊が天崎、井上小隊が人麻呂様城跡のある丘陵、篠原小隊が清滝、佐藤小隊が東灘において陣地の構築にあたり、5～6月頃から塹壕を掘り始めたようである。作業は交替制で、鉈嘴やスコップを使用した人力による掘削が昼夜を問わず行われた。ただし、石灰岩地帯である天崎地区については、削岩機を導入しようとしていたとのことである。兵士達は近くの公会堂などに宿泊しており、将来的には陣地内で生活ができる生息陣地とすべく工事を進めていたが、陣地は完成することなく終戦を迎えることとなった。

また、波介から戸波にかけての地域で塹壕の建設に従事していた部隊について語って頂いたのは、窪内露子さんである。「兵隊さんらはそりや不平も言わんと毎日、毎日、春野の方とかから波介とか戸波まで歩いて通うていましたぞね。壕を掘りよったにかわりません。まっこ、頭が下がる想いでした。」錦部隊（第11師団）の連隊事務所に勤務していた同氏によると、兵士達は朝8～9時頃塹壕を掘りに波介、戸波方面に向けて出発し、夕方の5時頃帰ってきていたようである。現在の大正教高岡大教会に連隊の大隊本部があり、窪内さんの勤めていた事務所は当時の小運搬組合（現サンシャイン高岡店付近）にあったとのことである。建設資材は現地で切り出した木材の他、製材所から購入した角材を使用していたとのことである。部隊名については、よく覚えていないとのことであったが、森山と秋山（ともに現在の春野町）の中間の山奥の外側から見たら分からぬ所に連隊の本部があったということや、渡部という副官や石山という見習い士官がいたということから考えて波介から戸波にかけて展開していた部隊は輜重兵第11連隊の第2大隊であったと思われる。また、人麻呂様城跡付近で塹壕を掘っていた部隊については、「吹越（人麻呂様城跡付近の地名）あたりで壕を掘りよったのは、小学校におった部隊やなかつたろうか。」と述べられていた。

天崎にお住まいの福原利己さんは、天崎地区における塹壕の建設について語って頂いた。福原さんのお話では、この辺りで塹壕を掘っていたのは、小学校に本部を置く部隊で、兵士達は近くの觀音堂や公会堂で寝泊まりしていたとのことである。他に天崎の作業現場では、伊野の方から奉仕の人が来て土を搔きだしていたこと、B29が近くの山をかすめるように飛んできた時には、兵士から「早う上がってこないかん。町から（人が）いっぱい来ちゅうきに、もう入れんようになる。おばさん早う来いや。」と塹壕へ入るように言われたことなど塹壕に関する話を聞かせて頂いた。また、福原さんの里である万願寺（仁淀川と波介川との合流点付近）にも軍隊が掘った塹壕があったが、平成10年（1998）の豪雨で潰れたとのことであった。

終戦時清滝にお住まいであった森澤京子さんからも塹壕に関する貴重な証言を頂いた。森澤さんは子供の頃、塹壕に入ったことがあり、子供の背に入る位の深さだったので、1m位の深さだっ

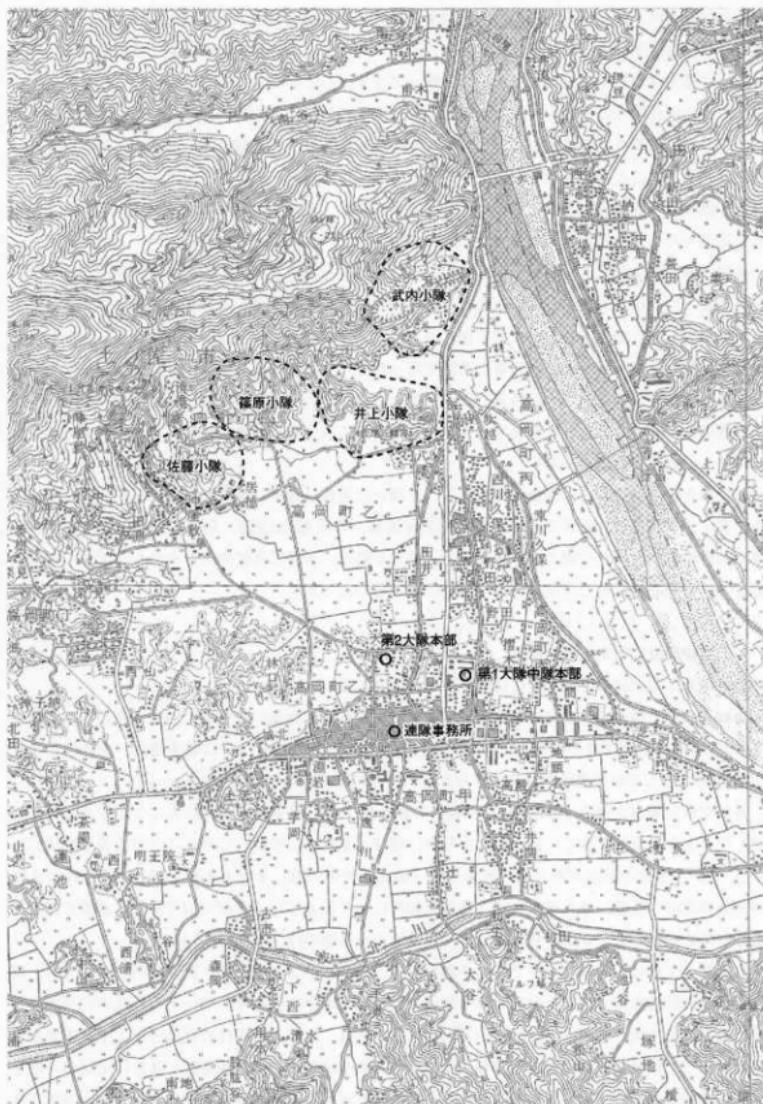


Fig. 20 人麻呂様城跡周辺の輜重兵第11連隊展開図 ($S=1/25,000$)

たのではと述べられている。壕の周囲には木が生えており、周りからは分からないようになっており、これは兵隊が隠れるために、そのようにしているのだという話を親から聞いたとも述べられていた。作業では、トロッコのようなものを使って土を出していたとのことであった。また、軍隊が掘った壕の他に清滝には個人が掘った壕もあり、そこに逃げ込んだ時の思い出も語って頂いた。それによると、森澤さんの家族ともう一件の家の避難場所としていた壕は、三段位の広さがあり、そこで寝起きすることもできたということである。他には高岡第一小学校の校庭にも塹壕があったことや、終戦後、兵士達がそれぞれの出身地に帰る時には、森澤さんははじめ地元の児童達がお遊戯をして見送ったことなども話して頂いた。

今回の調査により、人麻呂様城跡において塹壕を築いた部隊は輜重兵第11連隊であったことが明らかになった。輜重兵部隊とは、後方から第一線へ弾薬や食料を運ぶ支援部隊のこと、津野さんによると敵軍が上陸してきそうな沿岸部には、精強な歩兵第44連隊を配置し、そこから少し奥に入った第二線を担当したのが輜重兵第11連隊であることである。また、作業の様子や個人が掘った壕についても貴重な証言を得ることができた。今回は人麻呂様城跡一帯の調査であったが、同様の遺構は市内各所に数多く存在するものと思われ、これらの塹壕跡についていかにして記録に残していくかが今後の課題である。

最後に今回の調査では、塹壕に関する証言を頂いた皆様に加え、津野長幸さんを紹介して頂いた井上美千子さん、窪内露子さんの御主人で元鯨部隊（歩兵第236連隊）所属の窪内福春さんにも戦時中の体験談をお聞かせ頂くなど大変なるご協力を得た。皆様ご多忙中にもかかわらず快く調査に応じて頂いたことに対し、厚くお礼申し上げる次第であります。

(4) 戦争遺跡に対する取り組み

終戦から半世紀を超え、1999年には54年目の夏を迎える。

1998年11月、沖縄で初めての日本考古学教会が開かれた。台風の吹き戻しの強い風の中、各地から300名を超える研究者が集まってきた。2日目の第5分科会のテーマは戦争遺跡。日本考古学教会の分科会として戦争遺跡が取り上げられたのは初めてのことである^⑩。

各地で取り組みが報告される中で、「戦争体験を持つ人、戦争について語ることができる語り部が、年々少なくなっている。これからは、遺跡・遺物をして語らしめることが必要な時代になる。」という主旨の発言があった。戦争遺跡（第2次世界大戦）を考える時、戦争体験を持つ人々の言葉の記録（証言）は大切である。戦争を如何にして伝えていくかが大切であり、言葉と一緒に遺跡自体を通じて伝えることも重要なじめた。本物の持つ力は大きい。

戦跡考古学が日本考古学の中で提唱されたのは、1988年のことである。高知県内においても、圓豊城跡の高射砲跡地、塹壕などが文章で報告され、高知市中心街蒂サンロードの幕末の料亭調査の際に高知空襲の焼土層が検出されている。岡本桂典氏は、これらを現代の搅乱と捉えず、重要な戦時遺構として伊野史談において紹介した¹¹。発掘調査の対象として戦時遺構・遺物に正面から取り組んだ高知県初の調査として1997年の陣山北・陣山北Ⅲ区遺跡の調査があげられる。陣山海軍送信所跡地の発掘調査であり、高知平野に展開した四国防衛軍（第55軍）の廃棄した武器・弾薬類が検

出されている。報告書では、武器の構成から第55軍の姿について考察を進め、終戦後の弾薬処理中の爆発事故についても言及している。発掘調査からのアプローチも少ないながらも徐々に行われるようになり、戦時遺跡が考古学の対象として認知され始めた。

一方、発掘調査ではないが戦争を風化させない取り組みは各地で精力的に行われている。平和資料館の家では、戦時資料の収集・保存・展示や戦跡めぐりをおこなっており²²、高知生協でも毎年11月頃に高知市周辺の戦跡めぐりや戦跡マップの作成をおこなっている²³。

4. 明日への展望

日本各地で遺跡を保存したり、活用したりする取り組みが様々な形で進められている。史跡公園としては、縄文時代の三内丸山遺跡（青森県）、弥生時代の吉野ヶ里遺跡（佐賀県）など全国的に有名な遺跡で大規模な整備が進められ、多くの見学者が訪れている。両遺跡とも開発を前提に調査が始まったが、計画を変更し保存されることが決定した遺跡である。

中世の城館跡についても史跡公園として整備される例は多い。南部氏の居城である青森県八戸市の根城では、発掘調査の成果に基づいて当時の建物が復元され、生活の様子も含め理解できるように工夫されている。高知県内の例として、石垣を調査に基づいて移設保存した中村城跡、発掘調査で明らかになった建物跡の位置を示し公園として整備した岡豊城跡などがあげられる。

土佐市においても文化財に対する意識は高く、国・県・市指定の文化財については、はじめて訪れる人に対してもよく判るようにと説明板が設けられている。

今回の調査で堀切・尾根上の小郭・塹壕など一部の遺構は失われてしまったが、大半の中世城郭遺構と第2次世界大戦の塹壕は、建設される高速道路及び墓地の南側に残されている。北側は孟宗竹の優勢な竹林だが丘陵上部や南側斜面にはうっそうと繁る自然林が残っている。繁る木々の木漏れ日に照らされて、急斜面を上り降りするうち、人々は童心にかえる。中世の城郭の規模の大きさに驚き、張り巡らされた塹壕の異様さに目を見張り、第2次世界大戦当時何があったのかについて想いを馳せる。素晴らしい文化財である。

人麻呂様城跡は中世城郭さらに第2次大戦関連遺構の複合する遺跡として注目される。身边にある遺跡をどう活用していくのか。戦争体験を語ることのできる人々が少なくなりつつある今、戦時遺構をして語らしめることが益々重要なになっている。戦争体験の聞き取り調査、地元に眠る遺跡の踏査など、こつこつとした作業・努力の積み重ねは将来の土佐市の大きな財産である。

引用文献

- (1) 茶園義男『本土決戦四国防衛軍』上・下巻 徳島県教育出版センター 1971年
- (2) 山本哲也氏のご教示による。
- (3) 『告山集』第1巻 宗教(1)史料(1)編 1978年 高知県立図書館
- (4) 『長宗我部地検帳』高岡郡上 1963年 高知県立図書館
- (5) 『高知県遺跡地図』1998年高知県教育委員会『土佐市遺跡地図』1994年土佐市教育委員会
- (6) 『高知県中世城跡分布調査報告書』1984年 高知県教育委員会
- (7) 吉成承三氏のご教示による。

- (8) (1) に同じ
- (9) 『日本考古学協会1998年度沖縄大会資料集』沖縄大会委員会事務局
- (10) 岡本桂典「近現代の考古学 近現代史を掘る」『伊野史談38号』1994年 伊野史談会
- (11) 出原恵三「陣山海軍送信所と爆発事故」「陣山遺跡・陣山北三区遺跡」第IV章第4節 1997年
(財) 高知県埋蔵文化財センター
- (12) 同館館長 西森茂夫氏のご教示による。
- (13) 同生協 井上正隆氏のご教示による。



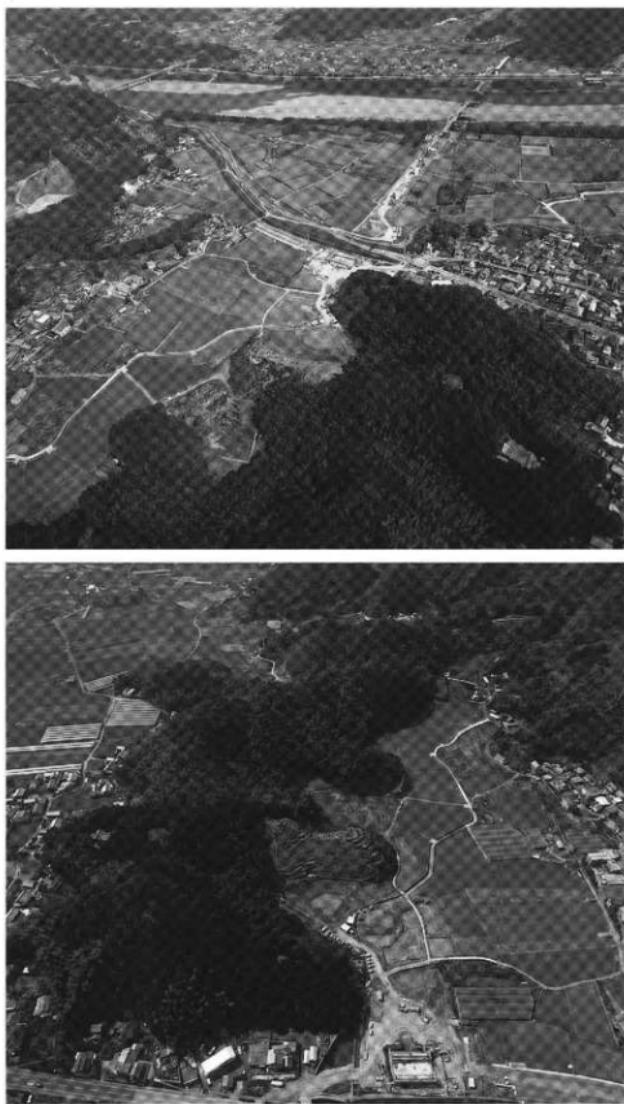
暫壇調査前風景

写真図版



人麻呂様城跡全景（上空より）

PL-2



入麻呂城跡全景（上空より）



人麻呂様城跡遠景（北側より）



人麻呂様城跡遠景（北側より）

PL-4



I区調查風景



I区遺構完掘状況



I区TR-1セクション



I区集石遺構



堀切調査前風景（南側上方より）



堀切調査前風景（西側より）



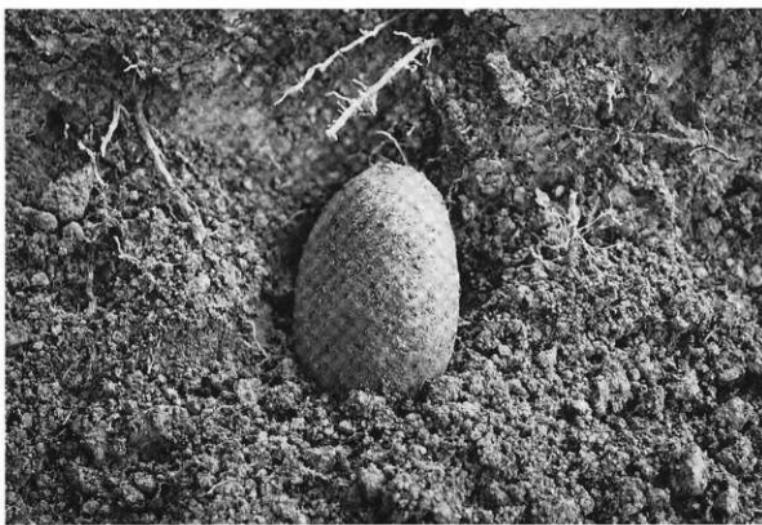
急斜面での調査（シャーターと排土運搬路）



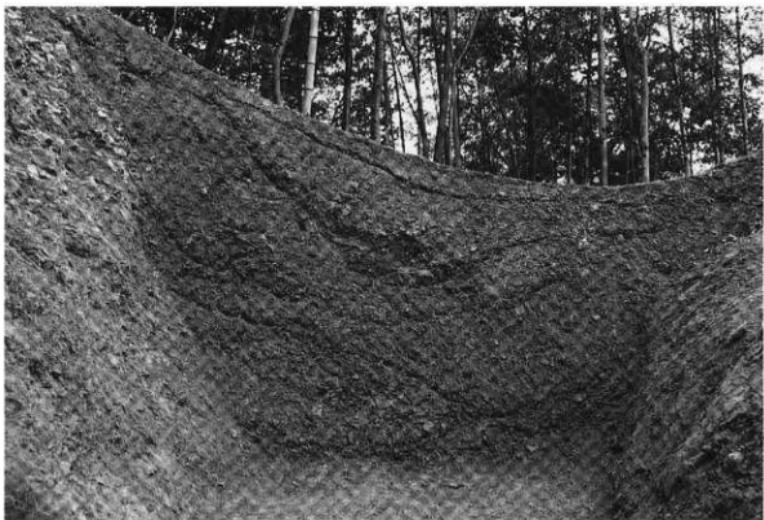
堀切調査風景



堀切調査風景



叩石出土状況



堀切（東からみたセクション）



堀切バンクセクション（東側より）